

ところ文庫 24

サロマ湖のカキと鑑沸

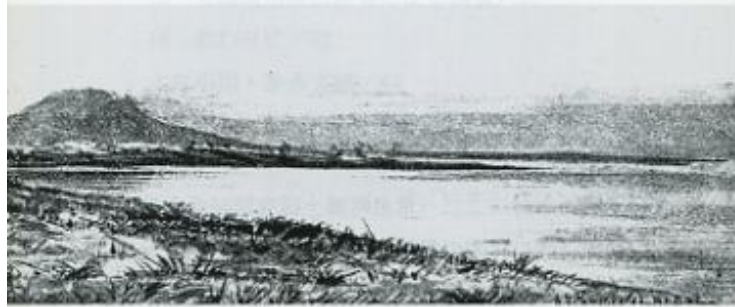
永田 次男・豊原 熙司



常呂町郷土研究同好会

サロマ湖のカキと鑑沸

永田 次男・豊原 照司



1 はじめに

2006（平成18）年10月12日のことです。「沼に泥が入り、被害が大きかったのでは」と聞いたところ、「沼でない。湖だ。レークだ。汽水湖だ。塘路湖と一緒にするな」と、永田が珍しく怒っている。話の発端は、数日前の8日の低気圧による被害のことです。「なあに、そのうち沼の出口が泥で塞がって、淡水湖になるさ」と、豊原の辛口。最後は、「湖も沼もアイヌ語ではトーで同じだ」の、話しの落ちで終わりました。

数年前に宇田川洋さんとの人間関係で、何とはなしに永田と豊原が同席することが多くなりました。永田はいつも半分酔っぱらっているはずなのに、いつもサロマ湖の行く末を案じています。大雨が降るたびに、サロマ湖に泥や排水、家畜の糞尿等が入ってくると。

たまたま豊原の手元に「水産調査報告・さろま湖」（北海道水産試験場1934）があり、このことを話したところ、早く見たいとのことでした。

この報告には、かつて現在の栄浦付近の鑑渚にサロマ湖の湖口があり、昭和4年に湧別側でサロマ湖とオホーツク海を隔てていた砂丘が開削され、その結果、カキが死滅状態となったことと、サロマ湖におけるカキの養殖の必要性が書かれています。

江戸から明治期の文書には、サロマ湖に隣接する鑑

沸が大きな集落として繁栄していたことが述べられています。どう考えても現在の鑑沸の集落とは結び付かないというのが正直な感想です。また、常呂市街地から湖岸の栄浦に通じる道の途中に、ワッカ入口というバス停があります。ワッカは栄浦から行くはずなのに、何でこんな場所が入り口なのかと、他所から来る友人は疑問に思っています。このたび、改めて古文書を見ていてそれらの謎が解けました。かつての鑑沸の繁栄は、サロマ湖の河口の閉鎖に伴って終わってしまったこと、そして鑑沸から常呂への往來の道は海岸線にあったことを改めて認識した次第です。

■ 現在、サロマ湖はカキとホタテで繁栄しています。しかし、ややもすると現在の水揚げ量に至るまでには多くの先達の漁師の努力があったことを忘れがちではなからうか。昭和初期のことです。サロマ湖に氷が張り、身を切るような寒さの中、上水が上がっても、男も女もカキ漁の仕事をするため、ゲートルの上にワラ靴を履いて作業をしていました。そんな話も伝え聞いています。今では考えられない事。防寒靴を履いても足がシバレそうになるのに。

このことについては後で詳しく触れますが、私たちはそのような先達の努力を何らかの形で残しておく必要があると考えています。そんなことから、サロマ湖の地誌とカキ・ホタテのことについてまとめる話にな

ったわけです。

■ サロマ湖は湧別町、佐呂間町、常呂町にわたる大湖ですが、ここで扱うのはサロマ湖東岸にかつて牡蠣島（栄浦）が存在していた関わりから、鑑沸の集落についてのみ触れることにします。

2 サロマ湖の誕生

サロマ湖の形成や時期については、いくつかの考え方があります。しかし、いずれの研究も砂洲の発達によってサロマ湖が形成されたとほぼ一致した見解を示しています。遠藤邦彦と上杉陽（遠藤・上杉1972）の古地理変遷を基に見てみます。

今からおよそ1万年前に氷河期が終わり温暖な気候となると、海面が上昇して現在の汀線を越えて内陸となる常呂川やサロマ湖の谷に海水が浸入しました。この時期にはオホーツク海との間に海岸砂丘が形成されておらず、サロマ湾とトコロ湾との大きな二つの内湾が形成されていました。湾内にはカキが繁殖している状況でした。

江戸時代に書かれた『青山沿岸図』や『協和私役』に出てくるクジラの伝承は、このことを裏付けていると思われます。それには「シヤルマノ高山ノ上、鯨ノ首アリ。ハロノ水底ニ尾ノ方ノ骨アリ。山上ノ首ハ苔蒸テ青シト云」（青山沿岸図）とか、「老夷人の物語に、此湖昔は大きな内海なり、…又鯨魚も此中漂着せし事ありと見へて鯨骨今も山根に残れりとぞ」とか記述されています。ですから、クジラが漂着したことをうかがい知ることができます。

約6,000年前ころとなると、温暖化によって海面

はさらに上昇をつづけ、現在の海面より約3～5mも上昇しています。いわゆる縄文海進と呼ばれる時期です。その一方、海岸砂丘の発達とトコロ川からの土砂の流出によって、湾口は塞がれ古砂丘が形成されていきます。それに伴ってトコロ湾はトコロ湖に姿を変えていき、湖内にはカキやホタテなどが生息するようになりました。

現在、常呂川右岸に所在している朝日トコロ貝塚は、この時期に先史時代の人たちによって残された遺跡です。この貝塚はカキが主体ですが、温暖系のハマグリも出土していることから、温暖な気候であったことを裏付けています。

縄文中期後半の4,500年前ころには一時的な冷涼となりますが、4,200年前前後の温暖化を経て、やがて寒冷化へと気候が変化し、それに伴い海岸線も後退していきます。いわゆる縄文海退です。

さらに、約1,000～1,200年前になると砂丘の発達によって、オホーツク海と内湾が隔てられ、サロマ湖が誕生しています。

- 明治11年(1878)『改正日本地誌略字引』
- 明治11年(1878)『大日本全國』
- 明治12年(1879)『北地履行記 中』(酒井忠郁)
- 明治16年(1883)『北海道沿海圖』
- 明治16年(1883)“JAPAN IN YEZO”(THOMAS WRIGHT
BLAKISTON)
- 明治17年(1884)『北海記聞』(清野謙次編)
- 明治20年(1887)『明治改正大日本圖』
- 明治20年(1887)『改正北海道圖』
- 明治23年(1890)『北海道旅行記』(佐藤喜代吉)
- 明治23年(1890)“ALONE WITH THE HAIRY AINU”
(A. H. SAVAGE LANDOR)
- 明治24年(1891)『羈旅漫錄(下)』(留岡幸助)
- 明治24年(1891)『北海道蝦夷語地名解』(永田方正)
- 明治26年(1893)“GEOLOGICAL MAP OF YEZO
(HOKKAIDO)”
- 明治26年(1893)“TRACKACROSS YEZO”
- 明治26年(1893)“NOTES ON A JOURNEY IN NORTH-
EAST YEZO”
- 明治31年(1898)『北海道殖民状況報文 北見国』(河野常吉)

4 記録に残るサロマ湖と鎗沸の名称

書名	サロマ湖	鎗沸
正保日本図	沼達浅	
西蝦夷地分間		トウフ川
蝦夷松前図		トウフツ
東山道陸奥松前千島及方州 掌覧之図		トウフツ
蝦夷拾遺	トウブツ湖水 有り	トウブツ
蝦夷地圖絵図		トウフツ
蝦夷風俗人情之沙汰		トウブ
蝦夷巡覧筆記	トウフツ沼	トウブツ
自高島至舍利沿岸二十三図	シャルマトウ、 シャルマノ沼	トウフツ
近藤重藏蝦夷地関係資料附図		トウフツ
蝦夷島全図		トウブツ
蝦夷道中記		トウフツ
西蝦夷地日記		トヲフツ
西蝦夷地名考		トウブツ
北海道全図（仮称）		トウブツ
蝦夷全図（仮称）	トープツ 湖中	トープツ
蝦夷地名考并里程記	シャルマトヲ	サルマトヲ
大日本沿海輿地図	トキセートー	トーフツ川
松前編郷帳		トウブツ
蝦夷日誌		トウブツ
村垣淡路守公務日記之三	トトワフツ	トウフツ

書名	サロマ湖	鑑沸
蝦夷紀行		トウブツ
北陸日記		登宇辺津
探蝦録	トウブツ	
蝦夷日記	トウフツ	トウブツ
協和私役	トウブツト	トウブツ
蝦夷行程記	トウフツ沼アリ	
竹四郎廻浦日記	トウフツ沼	トウブツ
手控・辰四番		トウフツ
入北記(島義勇)	トウフツノ沼	トウフツ
入北記(玉虫左太夫)	トウブツ沼	トウフツ
北浜紀行	トウフツノ大沼	トウフツ川口
東蝦私筆	サワマ沼	トウフツ
蝦夷日記(後藤蔵吉)	土宇布津	
西蝦夷日記	トウフツトウ 本名サルマトウ	トウツト
西部登宇武津誌	サルマトウ	トウブト
手控・午第八番	サルマ	トウブツ
西蝦夷地名附	トウフツ大沼	ヲタウンハケ
東西蝦夷場所境調書 参	サルマ	トウフツ
安政六年竹内下野守殿御廻 浦中諸書付		トウフツ
東西蝦夷山川地理取調図	サルマ	トウブツ
北辺要話	トウブツ沼	サルマ
日本地誌略	遼瀋ノ湖	
改正日本地誌略字引	遼瀋湖(トホブ チノミヅウミ)	

書名	サロマ湖	鑑沸
大日本全図	常呂湖	
北海道沿革図	サルマ湖(SARMA LAKE)	
明治改正大日本図	遼瀋湖	
改正北海道図	サルマ湖	
北地履行記	佐呂間湖	鑑沸村
JAPAN IN YEZO	SARUMA	
北海記聞	猿間沼	トウブツ
北海道旅行記	猿間湖(サル マコ)	鑑沸村(ト ウブツ)
ALONE WITH...	SARUMA LA- KE	TOUBTU
羅旅漫録	サルマ	鑑沸
北海道蝦夷語地名解	サロマトヲ	トーブト (鑑沸村)
GEOLOGICAL MAP...	Sarumako	
TRACKACROSS YEZO	Saruma Lake	
NOTES ON...	Saruma Lake	Saruma
北海道殖民状況報文・北見国	猿間湖	鑑沸村

サロマ湖について、もっとも古い記載は正保元年ころの『正保日本図』に出てくる「沼遼浅」と思われます。その後、『蝦夷拾遺』に「トウブツ湖水有り」と記載されています。しかし、これらは聞き取りによるものであり、「トウブツ湖水有り」となっているのは湖ではなく集落のトウフツを指しているものと考えら

れます。

実際にこの地を旅行し記録しているのは、寛政9年の『蝦夷巡覧筆記』（高橋壯四郎）が最初と思われます。それには「トウフツ沼」と具体的に書かれています。その後の記録を見ると、「シャルマトウ、シャルマノ沼」、「サルマトヲ」、「トワフツ」、「トウツツ」、「トウフツ」、「トウフツ沼」、「トウブツトウ」、「トウフツノ沼」、「トウブツ沼」、「トウフツノ大沼」、「サワマ沼」、「土宇布津」、「トウフツトウ本名サルマトウ」、「サルマトウ」、「トウフツ大沼」、「サルマ」、「トヲブツ沼」、「遠淵ノ沼」、「常呂湖」、「佐呂間湖」、「猿間沼」、「サロマトヲ」、「猿洞湖（サルマコ）」、「サルマ」、「サルマ湖」となっています。このうち「遠淵ノ沼」の以降の名称は明治年間になってからです。

これをみると、江戸時代の文政年間までは、シャルマトウ、シャルマノ沼、サルマトヲとなっているのですが、その後はトウフツノ沼とかトウフツ沼というようにサロマ湖の湖口となっている集落の所在したトウフツと関わる名称も用いられています。

サロマ湖は、文政7年の『蝦夷地名考并里程記』（上原無次郎）に「シャルマトヲ 湿沢のある沼と云ふ事。此沼の辺り湿沢なる故になす由」と解釈されています。明治年間の『蝦夷語地名解』（永田方正）にも、「サロマトー 茅アル沼 沼の周辺スベテ是レ茅故ニ

名ク」と同じような解釈がされています。地元の人は、昔はただトウと呼んでいたようです。鑑沸に住んでいた本川八十治が、「むかしはサロマ湖といわず、トウと呼んだものである」と話しています（宇田川編1994）。トウとは、湖や沼を意味しているアイヌ語です。

鑑沸について実際に踏査した際の記録は、寛政4・5（？）年の『西蝦夷地分間附図』です。それにはトウフ川と記されています。その後は「トウフツ」、「トウブ」、「トヲフツ」、「トウブツ目」、「サルマトヲ」、「ヲタウンハケ」、「トウブツ」、「登宇辺津」、「ウブツ」、「トウフツ川口」、「トウツト」、「トウブト」、「サルマ」、「鑑沸村」、「鑑沸村（トウブツ）」と呼ばれていますが、鑑沸村と表記されるのは明治年間になってからです。

これらの記述のうち、ヲタウンハケとなっているのが『西蝦夷地地名附』（安政5年）です。「沼尻子丑の方ヲタウンハケを川口とす」となっています。砂岬の突端と解釈できます。鑑沸はアイヌ語トープツで、湖の口の意味です。サロマ湖の流出部を指しています。

5 鑑沸の湖口

この湖口の状況については、古くから記録されています。「此処時々砂吹上て口閉る也。左候や土人等一勢に集りて、其口を明る也」(西蝦夷日誌)。「大風の後は、其トウ口閉りて歩行にて往来すれども、雪解また洪雨にて湖水増時は、廻水崇みて危き故、土人共其上に図する如き器にて沼を堀穿ち水を落すなり。左すれば機巾一尺か二尺に穿つ共直に百余間位に及ぶと。急流にして此処を、馬と平太船にて越人を刳来舟にて渡すにも、遂に湖中に出して越すよし也」(竹西郎船浦日記)。このように、古くには毎年秋の時化(しけ)によって砂が押し寄せ、そのために湖口が閉塞されるのですが、春になると付近に住んでいる人たちが掘削をすることによって水圧で湖口が自然に開口していたとされています。

明治29年この地を訪れた河野常吉は、鑑沸村について次のように述べています。サロマ湖は幅が約108～180mの砂州で海と隔てていて、湖口は東北の隅の鑑沸で開いている。毎年、11月・12月の暴風や激しい波によって砂が堆積して湖口が塞がれてしまうが、翌年の4・5月ごろになると村民がその湖口を切開いて、漁業や舟船の利用ができるようになる。毎年砂で閉鎖される湖口については、資金が乏しいので何とかする

考えはない。その一方河野は、この湖口を通年利用できるように提言をおこなっている。それには、サロマ湖は深いので大きな船が繫泊することができると言うが、湖口が浅いので出入りができない。これを通水してもまた閉じてしまうであろう。数年来、役所が何とかしようと開削工事を試みてはいるが、未だに効果を得ることができない。将来この開削が成功することがあったなら、北見国の海運が大きな利益をもたらすであろう、と述べています。後で触れますが、この湖口の閉鎖が鑑沸の衰退の原因となっています。

6 鰯沸の地誌

鰯沸には、古くから集落があったことで知られています。文化4年(1807)の『西蝦夷地日記』に、「トヲフツ 蝦夷家三十五軒 此所川あり 男女百三十六人 舟渡 乙名ハナクシャアイノ 脇乙名ヤウタラカ 小使シトバケ」、50年後の安政4年(1857)の『入北記』には「家数拾貳軒 トウフツ 此人別五拾八人 内訳男三拾一人 女貳拾七人」となっています。これを見ると、戸数・人口ともに激減しているのがわかります。これは場所請負による強制稼働によるものです。

明治6年には、「トヲフツ村7戸28人」(明治六年蝦夷郡土人戸籍簿)ですが、明治27年以來は移住者が増加して、29年末には26戸、117人となっています。ただし、このうちアイヌの人たちの家は8戸で、湖口に集落を形成し、仮小屋に居住する者が多いとされています。

明治4年(1871) トウフツ:夷家6軒・人別25人

明治12年(1879) 鰯沸:戸数8 31人・男16人

大正3年ころから、柴田直次郎の区画漁業権消滅にともない、牡蠣島地区に移転する者が多くなっていきます。

サロマ湖における漁業は、鰯沸の集落と関わっています。湖岸には集落はなく、漁のための小屋が所在していただけで居住していたのは鰯沸です。鰯沸は漁業

をおこなううえでは地の利を得ています。外海での漁と、季節的に遡上するサケ・マスを湖口で捕獲できる位置にあります。このことから、鰯沸からは通いで魚貝類の漁業がおこなわれていたと推測されます。

明治5年に各郡の村名が定められ、常呂郡七カ村となります。七カ村とは、トコロ村(常呂)・チイウシ村(小川)・トウフツ(鰯沸)村・ムエカヲツネ(生類常)村・フトチヤンナイ(太茶苗)村・ノツケウシ(野付牛)村・テシマナナイ(手師学)村で、明治8年にはトウフツ村も鰯沸村と漢字に改められています。

鰯沸村になってからの総代には、嶋崎梅蔵・鈴木重蔵・川畑益造がなっています。川畑は万延元年(1860)生まれで、鰯沸で漁業を営んでいます。資産家であったことから、明治27年(1894)の常呂村役場新築の際には、木材18石3斗余、柁46丸5合を寄付し、さらに木挽夫4人の木挽きを提供しています。また旅宿も営んでいて、明治24年10月19日に鰯沸に宿泊した留岡幸助(大正3年に遠軽家庭学校を創立)は、「此家ノ『アイノ一』ト川畑益蔵トテ此村ノ金持ト云。家ノ内ヲ見廻スニ、可成ノ暮向キト思ハル。鮭ノ乾物、『アシカ』ノ皮、又鉄瓶時計杯モアリテ、日本人ノ中等位ノ暮シ方ナリ」と述べています。

明治期の旅行者がサロマ湖と、鰯沸について記載しています。『鰯沸漫録』(留岡1891・明治24)から見てみ

ます。『四時鑑沸』ニ着ス。駅伝ニ往キテ一宿ヲ望ムニ、今夜ハ法会ナルヲ以テ断ルト老嫗ノ辞退ナリ。無止隣家ノ木賃屋止ニ宿ス。此家元『アイノー』ノ家ニテ此頃漁獵ノ為ニ来リタルモノナリト云。板屋ニシテ四面虚隙ヲ生ジテ風ヲモラシ、尤モ憐ムヘキノ家ナリ。食事ヲ畢ヘテ伏サントスル頃ハ七時頃ナリ。漁者数名来リテ数々酒盃ヲ傾ケテ蓋雑ナル語ヲ吐ク。語音皆南部津軽地方ノ人トコソ思ハル。而末ハ此家ノ主婦等ト賭博ヲ始ムル模様ナリ。八時過キ折ヲ以テ臥ス。此日天少シク曇リ、海上殊外怒濤ヲ上ク。当村ニハ『シャモ』ト数軒ノ『アイノー』ノミ。此ヨリ七里間、海ニ沿フタル大沼アリ。之ヲ『サルマ』ト云フ。廿日火 礼拝前日ノ如シ。此朝早く出タツ様ヲ雇ヒヲキシニ、駅伝ノ主人今直トノ語ヲ以テ、遂に午後三時ニ及ブ。致方ナキヲ以テ。此間『アイノー』ノ家ニ入りテ種々物語ル。此家ノ『アイノー』ト川畑益蔵トテ此村ノ金持ト云。家ノ内ヲ見廻スニ、可成ノ暮向キト思ハル。鮭ノ乾物、『アシカ』ノ皮、又鉄瓶時計杯モアリテ、日本人ノ中等位ノ暮シ方ナリ。細君ト老人ノミが辺ニ虎踞シテ喫茶シツツ種々ノ物語ヲ聞ク。中々日本語鮮明ニシテ語調モ稍聞クニ足ル。先ツ初メニ当村ノ鑑沸ト人如何ナル意味トキクニ、彼答テ曰ク、『トウ』トハ『アイノー』語ノ沼又ハ湖ノ義ニシテ『フツ』トハ入口ト云意義ナリ。此村ニハ『サルマ』湖ト謂ッテ縦七里横

老里周廻廿三里ノ大湖アリテ、当村ハ湖水ノ入口ナリ。故に鑑沸ト云。又問テ曰ク、此所ヨリ二里先キノ常呂ト云村ノ意ハ如何ニ。彼答テ曰ク、日本人『トコロ』ト云フナレトモ、実ハ『ツコロ』ハ本音ナリ。『ツ』ハ山ノ意味ニテ、『コロ』ハ岩と云意ナリ。…其他種々ノ事ヲ談ジテ去ル。午後三時馬ニ仕度シテ『サルマ』湖ノ渡ヲ渡リ、馬追ヲ先ニ立タセテ湧別ニ向フ。

明治17年7月19日に、貴族院議員の安場保和が息子の末喜と網走から船で立ち寄っています。「トウブツ（地名）カキ製造業者建部丑之助（開拓使の屯田少尉）新潟県人…十時半航海中針西々北に向、西々南に高山を見ボロイワと云。サルマ沼中央に臨めり。駅通所建部丑之助宅へ休。又小舟にて湖中を徘徊す、湖中カキの名産あり」。また安場末喜は「網走ヨリ猿間迄里程七里、直ニ此ノ所へ上陸シ建部牛補宅へ至ル。同所ハ猿間湖ト云フ湖辺ニアリ。少シク離レテ土人ノ村落戸数四五アリ」と鑑沸の様子を述べています。

また外国人も記録を残しています。明治16年(1883)にブラキストン線で知られるブラキストンと、明治23年(1890)のランドー、明治24年の地質学者のジョン・ミルンです。またヒッチコックは何枚かの写真を載せていますが、写真1は常呂での丸木舟の様子です。

ここでは、ミルンの見た常呂からサロマ湖の情景を紹介しておきます。7月27日の事です。



写真1 常呂アイヌの川舟（ヒッチコック1892）

「網走から馬に乗って、トコロというアイヌの村へ向かう。途中、まずマツにおおわれた丘陵を越え、シダ類やフキが生えた小さい谷をいくつか横切り、磁気を帯びた黒い砂がきらきら光る海辺に沿って進む。十四マイルの騎行でトコロに着く。ここの住民はアイヌ人には珍しく比較的清潔な身なりをしていて、暮らしも楽なようにみえた。それから草におおわれた砂丘を越えて四十分ほど馬で進むと、別のアイヌの村、サルマに着く。翌朝、サルマ湖の入江を馬で越すのに二時間を費やした後、湧別へ向かった。道は海と湖とを分ける砂嘴に沿って進む。二十マイルの距離を四時間で行く。時々丈の低いカシワの森の中を通ったが、だいたい草原で、馬はゆっくりトロットで進んだ。この砂嘴は幅役半マイルで、日本の海岸にある最大の砂嘴の一つである。…最も興味のある対象はたぶん花

々であろう。砂丘には野生のバラがいちめんに咲き、野生のエンドウ、ツリガネソウ、ナデシコの花々がどこにも見られた。湿地には青いアヤメが咲き、雑草に混じってヨモギやシダ状のカラムツソウが咲いていた。湧別は、わびしく、荒廃したアイヌの村で、わずか十二戸くらいである」。

図1はランドーのスケッチで、サロマ湖の情景とアイヌの女性が描かれています。



図1 鑑清のアイヌ美女（ランドー1890）

7 サロマ湖に生息する魚貝類

古文書からサロマ湖や鑑沸の状況をみてきましたが、サロマ湖に生息する魚貝類について書かれたものは少ないようです。もっとも古い記録は、近藤重蔵による寛政11年(1799)の地図に記載されているもので、それには「此沼口浅シ潟湖之当節二百石積ノ舟可入沼凡八里余鮭多シ」と書かれています。現在、サロマ湖の主産物となっているカキとサケが初めて出てきます。しかしこれは聞き取りによるものです。その後の、サロマ湖における魚貝類などの記載をみてみます。

自高島至舍利沿岸二十三図：「牡蛎丘ノ如シ 島アリ
カキカラ嶋ト云」

探蝦録：「秋鮭夏鰯魚湖に満つ」

北陸日記：「登古呂(落夷名)に宿し牡蠣を食す」

協和私役：「河豚魚あり。鰯魚あり。鮭魚尚多くあり」

竹四郎廻浦日記：「其川には鮭・鰯・鮎・鰻・イトウ・雑喉多しと。…湖中には其鰻・鰻・柳眼(ボラ)魚有。鰻も春より沼口破れ居る時は其より入るとかや。また沼貝、黄鰻(カキ)も有るよし(チャロマウコツ申口)」

手控・辰第四番：「此沼鮭・鰯・鮎・ゆごい・いとう・鰻。別てぼら多し。かき」

北沢紀行：「産物カキ貝蛸貝鰯鮭其外雑魚多シ」

入北記：「魚の類は、鮭 鰯 かれい ぼうら 牡蠣 大なり多し等種々」

入北記(玉虫左太夫)：「此処ニテ僕牡蠣ノ石ニツキ三組杯ノ形ヲナシタルヲ拾得タリ。投宿後即鎮台へ献ジタリ。…牡蠣蛸の類其外鮭鰯も漁すると云ふ」

東徼私筆：「トウフツ鰻(かき)多くして大なり。渡を待つ内に夷人とりて焚火に炙(あぶ)りて出したり。味美なり」

蝦夷日記：「魚鰯鮭多し」

西蝦夷日誌：「沼内鮭・コマイ・鰻等。貝類は鰻・鰻・鰻・アテカンビ・カバツセイ・シユリカイ等なり」

西部登宇武都誌：「魚類 鮭 ます 鮎 チライ 鰻 比目魚 ソイ チカ 鰯 海老 カジカ キウリ 蟹 コマイ 鰻 鰻 アテカンヘ(ホッキの類) カワセイ(鮎に似た貝) シユリカイ(イガイ)」

手控・午第八番：「トウブト 鮭、鰯、チライ(イトウ)、桃(ウグイ)、比目魚(ヒラメ)、ソイ、チカ、兆(ニシン)、カシカ(カワカジカ)、キウリ、蟹、海老、鰻(ボラ)、コマイ、鰻(カキ)、鰻(シジミ)、鰻(アサリ)、アヲカンヘ(砂ハマグリ)、カハツセイ(ミルガイ)、しうり貝(イガイ)」

西蝦夷地地名附：「海馬・水豹・鰻・鰻等其外海魚皆

此入海へ入、冬鮭此沼にて越冬するといふ。牡蠣の名物にて、此処のかきは形大にして外に類なし。ぼらの漁もあり」

北辺要話：「海豹鱈鮭栖す。またイトウといふ大魚を産す。鮭に似て長し。其大なるもの商人にて擔可不、長六尺に及有」

蝦夷日誌：「魚鱈鮭貝多し」

北地履行記：「沼内産物牡蠣鱈鮭チカ螺蛸コマイフルエ鰻イトウ鮭五六十束程輸出なす」。

北海道旅行記：「湖中種々の魚類を産す殊に牡蠣（かき）『土言ビハ長短の二種あり本道長牡蠣の大なる牡蠣殻を見たれども厚岸産に比すれば稍々及ばざるが如し』バカ貝等は最も多しと云ふ」

北海道殖民状況報文：「猿淵湖ハ鹹味ヲ帯ヒ諸々ノ魚類ニ富ム冬ハ鰻、鮭、鰾、『イトウ』等ヲ漁シテ販売シ春ハ『キウリ』、『ソイ』、『チカ』、小鯨、鰻、『コマイ』、河豚等ヲ漁シテ粕ニ製ス牡蠣モ亦繁殖ス鮭、鱈ハ湖中ニ入り猿淵川口ニ其漁場アリ沿海ニハ大鰾、鱈、鯨ヲ産ス」

これらの記録のうちで、もっとも詳しいのは『手控・午第八番』です。それには、サケ・マス・イトウ・ウグイ・ヒラメ・ソイ・チカ・ニシン・カワカジカ・キウリ・カニ・エビ・ボラ・コマイ・カキ・シジミ・

アサリ・ハマグリ・ミルガイ・イガイとなっています。しかし鑑沸での聞き取りなので、湖で獲れるものの他に海での収穫物も含まれていると考えられます。

その他の海産物としては、カレイ・ニシン・アメマス・ソイ・キウリ・ホッキの類・チョウザメ、フグ・サバがあげられています。このうち秋にはサケ、夏にはマスが湖に溢れるほど入り、ニシンも「春より沼口破れ居る時は其より入るとかや」となっていますので、湖口が開くと春に海から湖へ産卵のために遡上していることになります。淡水の影響の強い沿岸や、海水の混じる汽水湖で産卵する湖沼性の春ニシンの他に、回遊性のニシンも含まれているのでしょう。イトウも大きなものは1.8m近くにもなり、1人では担ぐことができないとも記述されています。

『北海道殖民状況報文』の漁業の項に、サロマ湖は塩味を帯びていろいろな種類の魚が豊富に生息している。冬はボラ・アメマス・ウグイ・イトウ等の漁をして販売する。春はキウリ・ソイ・チカ・小ニシン・カレイ・コマイ・フグ等の漁をして粕に加工している。カキも繁殖している。サケ・マスはサロマ湖に入り、サロマ川に漁場がある。外海には大ヒラメ・マス・ニシンが獲れる。明治28年の水産製品はおおよそ五千円となっている、と書かれていますので、豊富な魚が漁業の対象となっていたことが推測されます。

注目すべきはカキです。現在、サロマ湖のカキはマガキと呼ばれていますが、サロマ湖の開削による影響で消滅の危機に瀕し、その後に宮城県から移入されていることから水温や環境などの要因で品種的な型がみられるようです。北海道の在来種は、通称ナガガキ、エゾガキと呼ばれ、貝の形は長く大きいものとされています（山代ほか1972）。朝日トコロ貝塚から出土しているカキの貝殻も、北方型と推定される扁平で長い特長をもっています。30cmの長さの大型のものもみられます。

カキは古くからサロマ湖の名物でした。「牡蠣の名物にて、此処のかきは形大にして外に類なし」とか、「トウフツ蠣（かき）多くして大なり。渡を待つ内に夷人とりて焚火に炙（あぶ）りて出したり。味美なり」、「牡蠣大なり多し」と書かれています。

明治23年の記録ですが、「湖中種々の魚類を産す珠に牡蠣（かき）『土言ビハ長短の二種あり本道長牡蠣の大なる牡蠣殻を見たれども厚岸産に比すれば少々及ばざるが如し』バカ貝等は最も多しと云ふ」（北海道旅行記）と、貝類の豊富なことが述べられています。「長短の二種あり」というのは、ナガガキとイワガキを指していると思われます。イワガキは、日本海側で岩に張り付いているカキで同じ類と推測されます。「此処ニテ僕牡蠣ノ石ニツキ三組杯ノ形ヲナシタルヲ拾得タ

リ」との記載もみられることから、二種類のカキが生息していたことも考えられます。

ノトロ沼（能取湖）での記述ですが、「又牡蠣多し。甚大なり。八、九寸或は一尺に過るもあり。然ども貝は堅剛ならず」となっています。網走寄りで場所は離れていますが、サロマ湖にも30cm前後のカキが生息していたことを窺い知ることができます。

また、「山背の風強ければ時化込と成。海馬・水豹・鯨等其外海魚皆此入海へ入」ということから、東北の方向から冷たい風が吹くと、トド・アザラシ・チョウザメ・クジラが内海となるサロマ湖に入っていたようです。これらの海獣やチョウザメなども、捕獲の対象となったことはじゅうぶん考えられます。

8 カキ嶋

明治29年発行の20万分ノ1図（北海道版）に、蛸島という地名が記されています。現在の湖岸橋（栄浦）のあたりで、鶴雅ホテルのやや海寄りとなる地点です。「自高島至斜里海岸二十三里」（寛政10年・谷口青山）には、「此沼口ヲ渡ル。凡六十間。風波アテハ渡ル事得ス。牡蠣丘ノ如シ島アリ。カキカラ嶋ト云」と記載されています。ワッカから鑑沸への途中の記録です。

『東西蝦夷山川地理取調図』では、イチヤセモシリと記されていますが、伊藤せいichi氏はイチヤセイモシルで、「カキ貝・島」と解釈しています（伊藤2007）。

かつては、このカキの貝殻が湖上に堆積していました。牡蠣島という地名は、大正初期に工藤平蔵が名付けてから地名となったと言われています。その後、昭和16年の字地番改正で栄浦と変遷しています。昭和33年に栄浦の湖岸に所在した栄浦簡易宿泊所「かきじま荘」や、その後に建設された「かき島青年の家」も、この地名の名残りです。

北海道水産試験場の報告（昭和9年）の附図にも、カキ礁と牡蠣島の地名が記されていますので、カキ礁は遅くまで残っていたようです。ですから新湖口ができてカキが死滅するまでは、この付近でカキ漁をおこなっていたと推測されます。

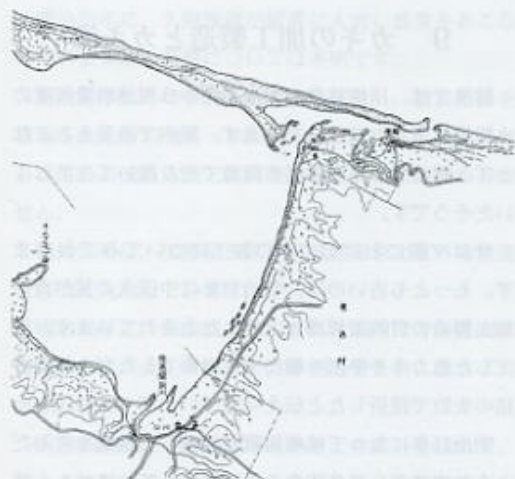


図2 カキ島と鑑沸付近図（北海道水産試験場1934）

また栄浦大橋の南西湖岸に延びているキムアネツプ岬付近には、今も湖底にカキ礁がいくつも残っています。

9 カキの加工製造とカキ漁

鑑沸では、川畑益蔵が明治初期から現地消費程度の小規模漁業をおこなっています。湖内で漁業をおこなって、雑漁やカキを常呂市街地で売り捌いて生活していたそうです。

サロマ湖におけるカキの加工についてみておきます。もっとも古いのは、明治13年に中国人の某がカキ加工製造の目的で鑑沸に入地したとされています。加工した乾カキを中国へ輸出する計画でしたが、乾燥方法の失敗で挫折したと伝えられています（常呂村史）。

明治15年になって嶋崎梅蔵が入地して漁業を営んだとされますが、具体的なことはわかっていません。当然、カキ漁もおこなっていたと思われます。

明治15・16年頃に、新潟人の建部丑之輔（助）が中国人の黄三梅と牡蠣製造所を設けています。建部は開拓使の屯田少尉（安場1884）で、一時は職工20数名を使用していたとされています。39,000斤（23,400kg）のカキの缶詰製造をおこなったのですが、収支が合わなくて廃業したとされます。改良は、厚岸の養殖缶詰を参考にしたとされています。黄三梅は明治9年に厚岸に来て、乾カキを製造し輸出したとされます。その時に小島利兵衛が、乾カキ、カキ醤油の製造法を聞き改良をおこなっています。

明治29年に、久野繁蔵が鑑沸に入地し漁業をおこなっていますが、詳細については不明です。

明治30年に、ロシア人がカキを採取し、改良方法を教示したとされます（常呂村史）。しかし、ここで述べられている改良方法とは何を指しているのかわかりません。

明治35年に、加藤留五郎が宮城県仙台より外海漁業を目的に入地しています。

明治42年に、柴田直次郎がサロマ湖内でカキ区画漁業権を得て、大正3年までカキ製造業をおこなっています。

明治43年には、柴田が厚岸から土井太一を招いて、乾カキの製造法や漁具、漁法などを改良して20箱、44年には40箱を生産していますが、一箱にどのくらいの量が入っていたのかはわかりません。このときの乾カキの製造方法は、焙炉法といわれています。

また、カキ採取の漁具と漁法の改良とは、カキ鉋の使用を指していると思われます。後で詳しく述べますが、貝柱の一端を小槌で打ち壊し、そこから小刀で身を剥ぐ方法です。これによって、大正元年より大規模な採取がおこなわれています。この年の冬期には、生ガキを約100樽出荷しています。その後は年産400樽前後で、価格は1樽4～6円90銭、1斤（600g）12銭で、生ガキは1斤12銭だったそうです。

参考までに缶詰製造について触れておきます。日本の缶詰製造は、明治4年に松田雅典が長崎でイワシの缶詰を製造したのが最初とされます。明治13年7月に開拓使によって、厚岸に缶詰製造所が設置され、カキ缶詰製造に着手しています。日本の缶詰製造の技術は、明治8年にアメリカ・ワシントンに岡沢明清、池田謙蔵が派遣され製法を習得させたのが始まりとされます。缶詰製造法は、初めは直火式で、含気法（加熱殺菌のみ）でしたが、日清戦争のころに（明治27～28年）軍の命令で缶を加熱して熱いうちに穴を開けてハンダ付けをして脱気する密閉後加熱排気という方法がおこなわれたとされます。厚岸缶詰製造所では含気法の技術を用いていたことから、腐敗などの粗製品を生み、やがて廃業となっています。

また厚岸における乾カキの製造法は、生鮮なカキを真水で洗浄して、真水を沸騰させた中に入れて短時間煮て冷却しないうちに取り出し再び水洗いをし、それをカゴに広げて水分を切り、二番ガマで煮て、再びカゴに入れて裏表を返しながらかきで乾燥します。その後、さらに焙が（ばいろ）に載せて24時間乾燥させます。これを焙炉から取り出し、冷却して缶詰にするという方法です。この作業はカキの大きさに選別しないと乾燥が均一にならないのと、火加減も注意が必要で、すし、日干しの際にも何度も手返しをしないとカキの

色や光沢を失うということです。

明治末から大正初期には、土井太一や工藤平蔵が乾カキ製造を目的に入地していますが、いずれも厚岸から来ていることから、厚岸での缶詰技術を基としていると思われます。厚岸のカキは明治20年頃から乱獲によって枯渇し、大正元年から3カ年間禁漁となっていることと関わっていると思われます。

大正4年のことですが、前出の柴田はカキ従業員を60人雇用し、カキ製造の業績をあげています。また北海道水産試験場から梶山英二技師が派遣されていますが、その報告によると1,260人の従業員となっています。しかし、この数字は当時の状況を考えますと、延べ人数と推測されます。

この年に北海道漁業取締規則が制定され、カキについては稚貝保護のため貝殻最長部が2寸5分（約7.5cm）未満のもの採取が禁止され、産卵期となる6月16日～9月30日まで禁漁となっています。

大正6年には、北海道廳令（牡蠣取締規則）によってサロマ湖の漁区を1～6区に設定されますが、1～4区は鍋沸漁業組合が牡蠣漁の権利を得ています。

この年には、サロマ湖岸に日本牡蠣株式会社設立され、缶詰製造を操業しますが、間もなく休止し翌年には鍋沸に牡蠣灰工場が操業を始めています。

外海の水揚げが乱獲で資源が枯渇した後は、カキ漁

に活路を求めています。大正7年に36円を投じて、カキ養殖事業をおこなっています。この結果、カキ漁に従事する船は大正7年の7隻から8年には30隻、9年には66隻と増加しています。11年にはカキの共同販売も実施され、この年の販売高は6,708円で、13年には10,684円とカキ漁が主体となっています。

大正11年に、北海道水産試験場の會上政幹技師がカキの産卵条件、稚貝の発育条件を調査し、11年には種苗試験をおこなっています。この調査・研究の成果に基づいて、この年から種苗や稚貝を厚岸湖に移殖しています。当時、厚岸では乱獲によってカキ資源が枯渇している状況でした。このことから、養殖を試みます。大正9年に宮城県松島湾産のカキを移殖していますが、輸送の不備により失敗しています。このため大正11年6月に北海道水産試験場釧路支場の秋谷六三技師が、厚岸奔渡（ばんと）水産組合の田中検査員を伴ってサロマ湖を視察し、種カキ2箱を移殖しています。大正12年に厚岸奔渡水産組合は解散し、カキの養殖は厚岸水産会に継承されます。この年の8月に、サロマ湖端沸に種苗施設を設け種苗試験をおこなっています。しかし、この事業は失敗に終わり、昭和2年8月には撤退しています。その後、昭和8年～10年にかけて北海道水産試験場がサロマ湖のカキ種苗を厚岸湖に移殖し、服部貞次郎に養成させて良好な結果を得た

とされますが、詳細については不明です。

カキ漁の漁具は、「北海道漁業志稿」（北水協会編纂1943）によると、「熊手の如きものを以て船中より海底を窺ひ予て獲或は罎の累積せし処は穿獲す」と、カキの採取方法について述べられています。

全道での収穫高をみると、明治19年で生ガキ1,694石、乾しガキ4,772石で、20年は乾しガキ246石、21年は生ガキ200石、乾しガキ34石となっています。また明治年間のことですが、生ガキは産地で消費されています。カキの製造は、缶詰または乾しガキで、缶詰は本州各地に輸送販売され、乾しガキは主に清国へ輸出販売されています。

10 ホタテ漁

明治35年に加藤留五郎が仙台から移住し、外海に漁場を求めて漁業を始めていますが、漁獲の目的が何であつたのかはわかっていません。

明治45年に常呂の沖でホタテ漁場が発見され、地元の漁船の他に雄武、紋別などから外来船が大挙して漁場に押し寄せています。鰺漁に移住する者が増えて、一大市街地を形成し活況を呈しています。この年の外来船は63隻で、船主や乗組員を合わせると258名という人数になっています。

その結果、乱獲となって資源が枯渇したので禁漁となります。その教訓を基に資源保護のために、ホタテの専用漁業権を設定する必要性が生じてきます。当時の鰺漁の漁業者、加藤留五郎・川畑益造ら5名が発起人となり、久野繁蔵ほか17名の同意を得て、明治45年7月30日付けをもって「鰺漁漁業組合」が設立されます。漁業権の地域は網走・常呂の群界から鰺漁までで、組合員23名で初代組合長には加藤留五郎が就任しています。水産専用漁業権は、ホタテ・ホッキ・サメガイ・ナマコです。

大正15年に資源が回復します。しかし、外来船100隻の操業を認めたために地元の50隻との操業で乱獲を招き再び禁漁となります。このホタテの盛況によっ

て、留萌などの道内の他に本州の福井・出雲・山形あたりからも漁を求めて来ています。鰺漁付近には番屋が建ち並び、加工場はもちろんのこと、料理屋が3軒、飲食店が3軒で、劇場までが在ったといわれています。ホタテブームが湧き上がり、昭和2年まで鰺漁は繁栄していますが、乱獲によってやがて衰退していきます。

その一方、ホタテは水温などの条件によって生産量変動しています。大発生したのは明治45年、大正15年、昭和14～15年ですが、明治45年以降は乱獲によって禁漁が8回で延べ17年に及んでいます。禁漁期間をみると、大正8～14年、昭和19年、23年、25～27年、30～31年、39年～40年、43年、47年となっています。

11 ホタテの養殖

昭和8年7月に、北海道水産試験場の木下虎一郎博士が湖内でカキの採苗をおこなったところ、カキに多数のホタテ稚貝が付着しているのを確認し、翌年から養殖試験がおこなわれます。場所はキムアネップです。これがサロマ湖におけるホタテ養殖の始まりです。

この事業は11年から本格化し、種苗を宗谷管内利尻に輸送しています。その後、配給地域は、宗谷、網走管内、根室および千島、釧路、日高等や青森県にまで拡大し、ホタテの種苗を供給しています。ホタテの基礎研究、外海の漁場環境や資源の調査は、木下博士の指導でサロマ湖から始まったといえます。

戦時中は食料増産政策によって、資源管理などの対策は無視されますが、戦後は漁場の方法の改善が図られ、大型種苗の大量生産、外海の生産の増産、湖内での養殖事業の開発がおこなわれています。その一方で、資源の利用規制、操業、経営などに積極的に取り組んでいます。

ホタテについての記事が『北海道倶楽部』（1936）に載っています。北見で帆立貝の養殖と題して、『浅海増殖に一時期を劃した北海道水産試験場の帆立貝人工孵化は北見水産会及北見四郡九漁業組合の手により企

業化され十一年度から実施される事に決定した、三ヶ年の継続事業として佐呂間湖能取湖の一ヶ所で重下式により帆立貝を一ヶ年七千万粒採苗し之を生産海区オホツク海北見沿岸に散布放流するもので百万粒の稚貝採苗に百円を用し百万粒で六千二百五十円、百斤八十五円として五千三百余円を収入し得る素晴らしい計画である」と事業計画を絶賛しています。

外海・湖内でのホタテの水揚げ数量は、昭和11年：84,530樽、昭和12年：35,151樽、昭和13年：5,550樽、昭和14年：59,304樽、昭和15年：156,452樽、昭和16年：44,094樽、昭和17年：2,429,232貫、昭和18年：798,624貫、昭和20年：73,934貫となっています。

12 サロマ湖の開削

話は前後しますが、昭和4年(1929)4月21日に新湖口が開削されます。湧別と常呂の境界付近です。暴風雨と融雪による増水で、一挙に約180mもの湖口となったと言われています。湧別町登栄床(トエトコ)の住民が、大正13年ころから最狭部の砂丘の掘削を続けていたのですが、いずれも失敗していました。

『ふるさと登栄床のあゆみ』(山口1993)に、湖口開削の願望と掘削当時のことが書かれています。「大正の初期、カキなどサロマ湖の漁業を目的に移住した人も、湖内漁業だけでなく、外海の漁業も合わせて行うことが有利であることに着目した。しかし、外海で操業するには、鑑沸まで船を回遊して外海に出るという不便さがあり、このために船を砂丘越しに外海へ運び、そしてまた戻るといった作業をくり返した。だが、このやり方では舟底の痛みが激しく、絶えられないことから、航路の掘削を思い立ち、大正14年から三里番屋の人たちが中心となって、郡境の最も狭い砂丘の切り開きを行った。しかし、水の流れは見ることはできたが、時化があるとたちまち塞がってしまい、また切り開くという繰り返しで三年の歳月が過ぎた。何とか部落の近くに湖口を切り開きたいというのは、この土地に住んでいる人たちの長年の悲願だった。また、雪

解け水が湖内にあふれ、サロマ湖の水位が上がるため、低地にある芭露などは湖岸から数キロにわたって冠水するという災害に毎年悩まされており、このために離農する人も少なくなかったといわれる」。掘削によって、水路が完成したときには歓喜の声が鳴り響いたと言われています。

この時の状況については、「此際湖内に滞溜せる多量の雪解水が新湖口より排出せらるる状況は頗る壯観を極め其水勢に依りて湖口と忽ち広大せらるるものと云ふ」(北海道水産試験場1934)と述べられています。

その一方、開削によって鑑沸の湖口が閉じ湖の水位も低下し、水温も上昇しない状態に陥り冬期間に浅い所に生息するカキは氷のために壊滅的な打撃を受ける事態に発展していきます。

まさに鑑沸の漁師にしてみたら、晴天の霹靂の状態でした。この湖口の開削によって、サロマ湖と海とを往来する水路となったわけです。それ以降は、この湖口は現湖口、鑑沸の湖口は旧湖口、さらに昭和53年にワッカ付近に新たな湖口が開削され第二湖口と呼ばれています。

13 カキの採取

カキの採取のために、サロマ湖では特有の漁具を使用し作業に従事していることが『北海道水産報告』に述べられています。それによると、作業には家族が2、3名が従事しています。このうちの1名は、カキ剥きのために女子が加わっています。サロマ湖のカキは自然発生であることから、立ったカキが多く上方にのみ成長しています。このことから挟み取りが便利で、このカキの集団を通称・島と呼んでいます。

あらかじめ採取する場所に赴いて、氷の上に小さい穴を穿けて、細い糸の先に重りを結びつけたものを湖中に落としてカキが隠れている牡蠣島を探し当てます。島を探り当てたら、まず1人が鋸で幅76cm、長さ3mの大きさで氷を切り取ります。切り取った大部分の氷は棒で氷面の下に沈めますが、一部はカキ挟みの天秤台として幅30cm、高さ60cm位にして氷上に引き上げて適当な場所に置きます。

その後、カキ挟みを使用する者から見て右側にカキ剥き台を設置して、台の右側に剥いた身を入れる樽を置きます。採取する時は冬の時期なので、寒風が吹き荒れることから、カキを剥く人の後方に天幕などで風よけをしています。これが準備作業です。

準備が終わったら、屈強な漁師がカキ鉋を水中に

入れて、木で作られている柄の部分で左右の手で握り、これを左右前後に揺らしながら動かして、感触でカキを探し当て挟みます。挟んだら木部を一括にして、挟んだカキが落ちないように静かに引き上げ天秤台に乗せて挟みが水面に出るまで引き、カキを挟んだままカキ剥き台の前に持っていく、挟みを開いてカキを落します。これを繰り返してカキを引き上げるわけです。

カキを剥く人は、引き上げたカキをまず左手に持ちます。右手には殻穿孔槌を持って、殻の頭を手前の方に向けて殻の凹んだ方を下にして、貝柱の部分と思われる箇所の殻の縁に近くの1.5~2.0cmの所に孔を穿けます。次に右手にカキ剥き小刀を持って、孔から差し入れて上の殻の貝柱を切り取り、上の殻を捨てて下の殻の肉柱を切り取り、これを剥き身入れの樽に入れます。剥き終わった殻は、右側に捨てます。これは2名で作業する場合で、3名の場合には穿孔と剥きは別々におこなうそうです。作業の中で、最も技術を要するのはカキ鉋を使用する者で、水中に巨大な鉋を下ろしてほとんど金属部分の感触だけで探し当ててからです。まさに職人芸といえます。

この採取方法はカキの減少に伴って、いろいろな場所を移動しながらカキの在る島を探しながらおこなうという大変な作業でした。

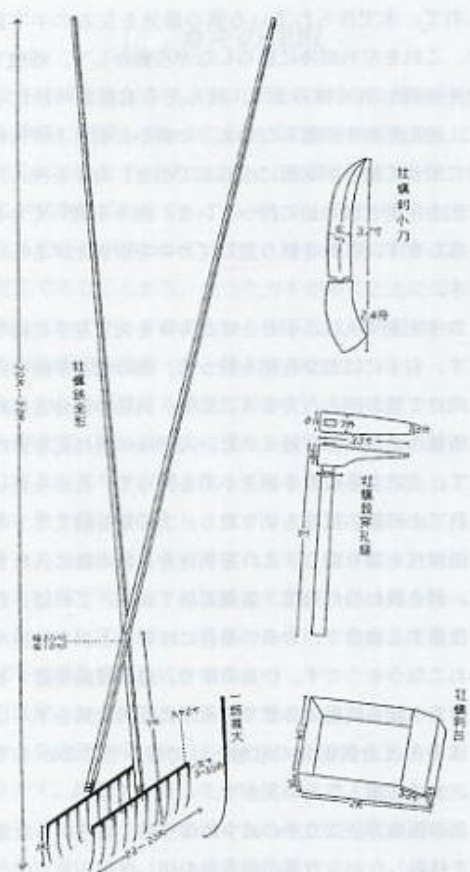


図3 カキ漁の道具（北海道水産試験場1934）

14 新湖口後のカキ漁

宇田川さん等による、長谷川鶴松さんからの聞き取りがあります(宇田川編1998)。「今の養殖のハウスのあるでしょ。あの陰のほうにずっとある瀬はカキの瀬だからね。天然貝のがびっちりだったんですよ。そしてね、このトウの口がくわわってからね、一時死んだそうですよ。それでもね、わしら引き揚げてきてからでも、天然ものをまだ獲ったな。正月にな、わしら獲りに行ったな。だからね、冬はずっと氷落ちるまで、氷の上でカキ獲りやったね。鑑沸・カキ島の人たちはね。昔は」。

「私たちも、昭和4年に新湖口ができてからの鑑沸のことを、伝え聞いている人に尋ねてみました。

昔のことを教えて欲しい? : 「何するのさ。昔のことなんて」。

「たまたま機会があって、残しておきたいので? : 「俺も、聞いてることを、どっかに残しておきたいと思ってたんだ。親父や叔父や長老から、断片的なことは聞いてるんで」。

湖口が新しくできてからの鑑沸は? : 「俺の年代(60歳)では、昔を知っている人(漁師)はいないわけさ。後から組合員になってる人が多いから。ことあるごとに、よく言葉では先達が先達がって言ってるけど、そ

の先達でさえわからんも。昔のことは。そんな思いがある。それを考えると、いろんな部分でその頃の事を少しでも残さんとならんと思っていた。聞き取りが必要だと。20年前にやってはいるんだよ。だけど、何もまとまってないんだわ。町史見ても出てるけどさ。偉い人たちのことばかりでしょ。俺の言いたいことは、じゃ、下の（人の）生活どうなっていたのかは語られていないんだ。乾ガキにして出したって言ったって、どうやって乾して、どうしたかなんかわらんべさ。俺なんか、まったく詳しいことはわからんけど、やっぱり知っておきたいのさ。確かに町史には、ある程度のことは残っている。だけど、ここに居た明治から大正に入ってきた人の話は何もないべさ。誰々が居て、例えば工藤平蔵さんがこうしたとかさ。カキを、でかいカキを取って乾ガキにして売ってたとか、そういうでっかいことは出てくる。新谷さんがどうしたとか。新谷さんのことはよく知ってる。公平で立派な人だったんだ。本当に尊敬できる人だったんだから。しかし、それを支えた根底にいた者は誰だったんか。俺も若かったし、上に立つ人だけの町史でないんでないかと。ただ思いはあったさ。ずっと。下で働いて、一生懸命働いてね。上に立ってる、そういう人には見えないのさ。いや、分かっているつもりでも見えない部分があるのさ。本当の姿は見えてこないのさ。どっかの場面

で、当時の生活の一部でも記録を残しておかんと駄目になる。湖の将来や、先達の苦勞を考えると、若い人も知っておくべきでないの。昔の事を」。

湧別の湖口ができてからは？：「こっちは悲惨なんだけど、相手（湧別側）も悲惨なんだよ。それまで大変な状況だったんだから。相手側は水の動きがないから少しだけ臭かったというし、海に舟を出すにしても砂浜を越えなくちゃならないし。鑑沸の出口が開かないと、農家も水浸くし。その気持ちはわかるよ。こっちだって、口が開かないと畑に水がうるし。だけど、いつも何とか皆んなで口開けていたから。それより漁師のこと考えたら、カキ駄目になったんだから。取れなくなったんで。その後、こっちで何とかしようと鑑沸の口を開ける作業をしたんだけど、駄目だったんだと。完全に湖の水位が下がってしまっただけ」。

サロマ湖の水位について？：「春先には水嵩が2mぐらい高かった。サロマ湖の方が。だから掘ると、一気に海に流れ込んだ。そんなに苦勞はしなかったみたいだ。それでも鑑沸の付近の人は、皆んなで手伝ったみたいだよ」。

相手側に対する感情的なものは？：「それは当然あるだろう。自分らの都合ばかりを考えてという。こっちはカキが絶滅に近かったんだから。こっちにすると、ずっとそんな感情を持っていたのは事実だし」。

カキは絶滅？：「絶滅にはなっていない。やはり何とか、細々と生きていたけどさ。でも完全に商売は下がってしまった。今まで春に取っていたのが。だから常呂側にすると、被害を考えると大変なことを、奴らは、とんでもないことをやってくれたことになる」。

今でもしこりは？：「ところがサロマ湖全体のことを考えると、全体として大増産になり、結果としては良かったことになるんでないか。第2湖口を25m広げるんだけど、やはり湧別では反対するという事もあったのさ。向こうでも防礁堤が13本ぐらいあるのさ。そうすると、それだけで潮の流れが変わるのさ。それによって、昔は行っていた潮が行かなくなる。駄目になりそうなどがあるのさ。東側にしたら、もう少し潮の流れが欲しいし、海に出るのに幅が狭く、架かっている橋の高さが低いから、場合によってはマストも下ろさなくちゃなんないんだよ。いちいち、お互い言い分はあるんだけど、お互い欲の皮つっぱったって、しょうがないしょ。どっかで妥協しないと」。

鑑沸は？：「鑑沸は昔は賑わっていたと聞いたよ。明治（時代）の記録にもあるけど、その頃は旅館もあったというから。何十人かの部落が在ったというから。湧別側が開いてから水位が下がって鑑沸の口が開いて。あそこに水路があって、そこからホタテを揚げていたわけさ。うちの親父たちもホタテやってて、そ

れ（水路）がなくなったからって、湧別まで廻ってホタテを取ることはならんだろう。砂浜で小屋建てて、ホタテ獲ってたわけさ。頑張ってたみたいだよ」。

昔は？：「考えたら、一番必要なのは本当に携わった人の生活をみると、そこで初めて何をやってきたのかわかるのさ。カキやホタテ獲って暮らしていた人たちの。そうでないかい。昔、一尺のカキあったも。俺あれども。50年くらい前だけどいたんだ。30cm越えてたけど。いたのさ。今なら、ほとんどいないけどさ。考えたら、我々は昔、向こう（本州）から来た人間だから。だから、苦労したんだろう。生活を考えたら。冬は、まだいいさ。雪だから。春、3月になると氷の上にうわ水（上水）があがるべさ。ゲートル巻いたって、ツマゴだもの。ベチャベチャ濡れるに決まってる。信じられないしょ。カキ取りに行くとしたら、こんなのに（火鉢みたいなもの）炭入れて燂して、あと風吹いてきても雪降っても、突き棒立てて。ムシロで風避け作って、男がこうやってカキの礁からカキを鉄上げ、姉さんみためのが横でカキを剥く。そのうち雪がひどくなる。ある程度、昼過ぎまでやって帰ってくる。そんな苦労してたみたいだ」。

小屋掛けは？：「小屋掛けはしない。さっき言ったように、ツキにムシロで風避けさ。いつのまにか、体に雪が積もって雪ダルマさ。とんでもない話でしょ。

そうやってやっていた。氷の上に火鉢置いて、手炙りながら。だって、ソリ引っぱって現場まで行く間に、手ひゃつこいんだもの。そんな生活を送りながらも、昔の人は頑張っていたんだべさ。帰りは獲ったカキ積んで来るから、もっと大変だべさ。道具も皆んな凍ってるし。話は違うけど、カレイの刺し網なんかは、考えたら現場まで行くのにソリ曳っぱっていたのが、イヌに曳っぱらせて、その後バイクになって、そしてスノーモービル。今さらソリは曳っぱれない。あそこまでは、時代の流れかしらんけど、そういう移り変わりがあったことぐらいは覚えておくべきでないかい」。

場所？：「ホロミマナイの辺り。もう深いとこのカキもなかったんでない。浅いとこは死んでしまってるし。カキの島探し当てるの大変だったはずだよ。カキを探すのに、柴浦からホロミマナイまでソリを曳いて歩いて行って、氷を割って探すんだから。カキの島ができてんのさ。ポツポツと。昭和44、5年ころだったかな。ホタテ養殖で、ノシを沈める時、何ぼやっても沈まないんだわ。ただ当時は漁探（漁群探知機）がないから、わかんなかったけど。いろいろ、あの辺り測ってみたら（深さが）、三つ（4.5m）や、四つ（6m）位しかないのさ。島だらけなのさ。カレイの刺し網だって、浮きは何だといったら、オンコ（イチイ）の木

浮きなんだよ。この位の大きさ（長さ20cm、幅2cm）の浮きに。下（紐）は何だといったら、針金の輪っこさ。八番線ぐらいの太さの輪っこさ。その前は何だったら、ホタテの殻さ。ホタテの殻だったのさ。考えたらニシン（鰯）だってそうでない。一尺ぐらいのアバ（鰯の浮き）に。アバに何か字を書いてあるんだって。例えば、歌みたいの書いてたんでない。そんなの、好きだったの居たんでない。作った漁師は、何か思いがあったんでない」。

生活は？：「戦後でも、冬、板張りの家で、入り口は板戸でなくムシロを下げていた。冬でもそれで耐えて生活していた。斜里でも言ってた。昔の漁師は乞食以下だったと聞いている。そんな暮らしだったんでない。世代が変わったのかもしれないけど、俺たちの上の人たちまでかな。本当に苦労した辛さを知っているのは、昭和41年ころまでの辛さを。イモ食って、冬はイモ食ってという世代がいなくなったのさ。そう言えばカボチャも食ったな。カボチャって言ったって、ベチョベチョなやつあって、食うっていうより吸るって感じだった。今の組合員たら三分の二は知らないだろう。ホタテがいく（良く）なって、イモなんて食ったなんて知らないって。何もイモ食ってカボチャ食って、苦労したから偉いなんて思っていない。ただ、そういう部分で良いとか悪いとか言うんじゃないって、親

父たちや、そういう先達の苦勞をさ。ホタテだって、何十年もかかってやって来て育ったんだよ、って言うことでないかい。ホタテだって湧別のとこ切って、初めてホタテのラバあったの知って。そういうことから、養殖が始まったんでないかい。先ずイカダを作って、ホタテの養殖が始まったんでないかい。貝殻下げたけど、あんまり良くなって、次にショロの敷、そしてフィルムなどをやったけど、あんまり良くなって今のナイロン網になり、成功したんだよ。あれは何十年もやってきてるんだよね。先達のそんな苦勞があって、初めて今の暮らしが成り立っているわけさ。それを忘れちゃいけないべさ。昔の生活や湖内の環境なんかを知って、勉強しないとサロマ湖は駄目になると思うんだ」。

カキ漁の制限は？：「自分でやりたいだけ、やればいい。水揚げは自分のもの。やる人はたくさんやる。たくさんやってる人は、いい倉庫建ててるけど、そうでなかったら戸がムシロで、そんなとこで剥くん。カキをさ。薪ストーブ焚いて。ゴム手袋ないから、軍手に自転車のチューブ先の方に縫って置いてやったもんだ。ゴムなら切れないから、そうやってたもんだ。お湯入れて、手あっためる（温める）だ。こうやって。ひゃっこいから。夜は洗濯して朝まで乾しておく」。

漁具も変わったの？：「カキだってさあ。今みんな、タマ（浮き球）が化繊（化学繊維）だべさ。昔、ガラス玉だもん。ガラス玉、カクって言うんだ。編みにして。マニラロープくるんだり、四角く縛ったり、編んだり。そして、コールトル漬けにするわけさ。腐んないから。ところが、ちょっとぶつけるだけで割れるんだ。ガラスだから。大変だったんだ。今だったら全然関係ないしょ。ぶん投げたって割れるわけでないから。そういう苦勞なんて、今知らないしょ。カキを扶める縄だって、昔はカキ縄って言って、ワラ縄に燃りをかけていたんだ。子供がよく手伝っていたさ。今は化繊だし、燃りもかかっているから切るだけだもの。大変なことだった」。

出稼ぎは？：「行った。行った。昭和41年ころだと思うな。出稼ぎ覚えたのは。ホタテが獲れなくなった時だから。出稼ぎ行ったもんだ。漁師は。誰かが行きだしたら、皆んな行きだしたんだ」。

止めたのは？：「昭和45年ころ、ピークだと思うよ。止めたのは、47、8年でないかなあ。止めたのは、本当に止めたのは。ホタテ獲れるようになったから」。

何か他にはありますか？：「何かいろんなこと喋ったけど、俺は俺なりに心配してるわけさ。俺だって苦勞を越えたから、こんなこと言えるのさ。こんなこと言っちゃ怒られるけど、皆んな良いことりだから」。

環境だって、昔、潜水してみたら、昔は皆んなカキが生きてたんだろうと思った。皆んな山になってるんだよ。だけど、皆んな泥だよ。それに埋まってる。と言うことは、絶対、ふつうでないも。養殖、養殖っていうけど、サロマ湖が駄目になったらお終いでしょう。俺の言いたいことは、湖を大事にしくちゃ駄目ということさ。だからこそ、誰かが昔のこと知って語り継がないとならんと。そんな思いがあるわけさ。鑑沸の衰退だって、はっきりしているのさ。それだって、いろんな話になってるかも知れないよ。違う人に聞いたら、違う話になってるかもしれないよ。だって、偉い人の話ばかり聞いてるから。したらさ、そうでない。ほんとにさ。下で一生懸命働いて。話が偉い人ばかりだから、本当の姿は見えてこない。だからこそ、根底にいて生活していた者の思いが必要なんでない。俺はほんとに思ってる」。

15 北海道水産試験場による調査

昭和4年に新湖口が開削された前後に、北海道水産試験場によつてサロマ湖の水産調査が実施されています。調査は昭和3年7月、10月、同4年7月、同6年7月、同7年2月の5回です。『水産調査報告・サロマ湖』(1934)には、次のように書かれています(原文を読み下し、さらに要約しています)。

サロマ湖の東北部に牡蠣島の村落ある。元々この沖合には、牡蠣殻によつて自然に数ヶ所のカキ礁が作られており、総ての礁はカキばかりである。自然の繁殖場として採捕が禁止されたりしていたことと、湖内で漁業をする上で立地が非常に便利なことから少しずつ人家が増えていき、今日の牡蠣島の集落が作られるようになったと思われる。

しかし、湖口が湧別側に移ったことによって、湖岸に在った集落の盛衰は注目すべきことである。釧路は外海との交通が断たれたことから、ホタテ漁業の根拠地としての価値を失い新しい湖口に比べると著しく寂れてしまった。これに比べ三里番屋(湖口の西約1km)は盛況を呈しつつある。また湖内の水質の変化や、魚類の来遊状況の変化等は特質すべきものである。

佐呂間漁業組合管内において、今までは釧路方面に排水口があった時には、湖水の注排水の交流が充分で

あったが、湖口が変更になって緩慢になる傾向にある。カキの生息適地は全般的に分布しているが、キムアネツ岬を中心とするものの他に梶岩、富士土（とっふし）沖は生息地としては適地である。また鑑沸方面は湖口が変更になる前には、最良のカキが産出していたが、昭和4年の変更後は繁殖保護区域としての牡蠣島も冬季に水面が低下した結果、例年のように牡蠣島が水面下にならないので凍結し、そのほとんどが凍死全滅してしまった。

もともとサロマ湖の排水口は鑑沸村付近にあって、湖から牡蠣島を過ぎてから屈曲した水路を通じて外海に通じていた。この時代には、毎年秋の季節の10、11月ころになれば湖口は閉塞するを常としていた。翌年の春4、5月ころに、雪溶け水によって湖の水位が上昇するのを見て、湖口を掘削し開通させるのが例年のことであった。

新湖口が開削された後は、冬期間には湖面は結氷によって覆われるが、湖口が閉塞されることがないために以前のように水位が甚しく上昇することがなくなった。このために、昭和5年4月に鑑沸の牡蠣島は氷結してしまい、多数の牡蠣が斃死してしまった。昔は冬期間に水位が上昇して結氷しても被害を及ぼすことはなかった。

このように述べられています。この報告は、湖口が

掘削される前後に調査がおこなわれていることから、サロマ湖の現状を客観的に述べています。昭和5年、6年のカキの漁獲高は、次のようになっています（水産調査報告1934）。

	鑑沸漁業組合	湧別漁業組合	鑑沸漁業組合
昭和5年	22,500kg	49,219kg・乾カキ1,680kg	31,459kg
昭和6年	32,156kg	44,063kg・乾カキ2,175kg	14,494kg

この報告書では、将来のサロマ湖についても提言しています。

サロマ湖産のカキは積極的な増殖が可能なのに、現在は自然発生のもので採取し何らかの繁殖保護的な施設を設置することなく現状のままである。このままでは将来漁業として維持することが困難になるだけでなく、現在においても減少の傾向となっているので、一日も早く積極的な増殖施設を造るべきである。

カキはサロマ湖のもっとも重要な漁業であるが、現在は何らの積極的な増殖施設がなく自然状態のものだけを採取している状態である。春・秋の季節に八尺曳き、冬は湖面が結氷した後に水面に穴を穿けて採取している。しかし、現在のような漁業状態を継続するのでは、カキ漁もいずれ漁業としても形態を失ってしまうであろう。積極的な繁殖保護施設を造らないで、無制限に近い状態で乱獲すれば近い将来には漁業として

成り立たなくなってしまう。このことから、広島、宮城県のように積極的な増殖方法をおこなうには未だ確固たる試験調査もしていないことから、実際問題として論じることはできないが、各組合の区域内に一定の禁漁区を設けて、いわゆる輪採方法が最も妥当と考えられる。しかし現在においても、採取量が減少の傾向にあることから、他の組合の地区に浸入したりして各組合間に紛争が生じる場合が多い。禁漁区を設定する場合にはお互いの組合が話し合って問題解決を図るべきである。

現在は、カキを無制限に漁獲しているために販売統制もない状態である。販売の価格もないので中間商人に利益を独占され、漁業者には利益がほとんどない状態である。

これらのことから、経済的にも恵まれることなく、将来共にこの状態を脱出することができないだろう。それ故に、生産制限をおこない販売統制をして価格の向上を計るべきである。

昭和7年11月に三漁業組合の代表者によって、佐呂間湖産牡蠣販売統制販路拡大と養殖を目的として、佐呂間漁業組合連合会を設立したと聞いたが、その規約や事業予算を詳細に検討したが、共同販売統制が主要な目的で養殖方面については言及しているものはいない。このように販売統制のみを前提とする事は、カキ

漁業の将来のためには非常に心配なことである。漁業者の経済向上は、漁村の繁栄のためには望むところであるが、しかし根本的には資源の永続施設を考慮することを念頭におくことが漁業を永遠に維持するために緊急なことである。できうことならば、三漁業組合が丸となって佐呂間漁業組合を作り、販売統制だけでなく各種の繁殖保護施設、増殖施設を造るというような高所からみた積極的な施策を講じれば、必ずサロマ湖の水産の面目を一新できると信じている。

ここでは現状を把握した上で、将来のサロマ湖と漁師のあるべき姿を分析し提言しているのがわかります。すでに述べたように木下博士のサロマ湖での調査・研究は、この報告が下地となっておこなわれていたと言えるかと思います。

16 おわりに

いろいろと文書をあさりながら、カキを主体にサロマ湖の漁と鑑沸のことをみてきました。今となつては、わからない事ばかりでした。『常呂村史』に「歳月の流転、時代の変遷と共に、開境側の諸人は逝くき、或は退去して、過去を知る者、次第に其の影を潜め、綫に是を談ずる者あるも亦漸く記憶を辿るに過ぎず」と書かれています。昭和12年のことです。時期遅し、まさにそんな感じがします。

カキ漁に依存し、カキが瀬死の状態になってからの実際に漁をしていた人たちのことを掘り下げたかったのですが、結局はサロマ湖におけるカキ漁の一端をかいま見ただけとなつてしまいました。しかし言えることは、かつてのカキの衰退そして繁栄、そこにカキ漁に携わっていた人たちのことを、誰かがその一端でも記録しておく必要があると思います。

ある漁師さんが言っていました。「先達の苦勞を、実際に見てなくても聞いているだけでも、次の展開っていうのか、湖を大事にしなくちゃならないことはわかると思うよ。それを知ってるかどうかで違ってくるべさ。環境はまったく変わってないと言うけど、現実には埋まっているわけさ。黙っておいたって。今更、昔に戻ることなんてできっこないし、そんな必要もないけ

ど、知っとくべきでないの」と。

これからも地球温暖化など、いろいろな問題が生じてくると思われます。自然の状態でもサロマ湖は水質も含めて変化してくることは、必然と考えられます。いずれにしても、かつて先達が苦勞したことを記憶の中に留めながら、将来のサロマ湖の利用を考えるべきと痛感しています。

最後になりましたが、文献資料の間覧では伊藤せいち氏に、図の作製や原稿の清書などでは坂井通子、加藤春雄氏に大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます次第です。

主な引用・参考文献

- 厚岸町史編さん委員会 1975 『厚岸町史』厚岸町
- 宇田川洋編 1998 『常呂町の昔話』ところ文庫14、常呂町郷土研究同好会
- 遠藤邦彦・上杉陽 1972 「オホーツク海沿岸トコロ海岸平野の地形・地質」『常呂』東京大学文学部
- 北橋保男訳 (R. ヒッチコック 著) 1985 『アイヌ人とその文化』六興出版
- 清野謙次 1931 「明治十七年北海道巡回日記」『北海記聞』
- 登栄床郷土編集委員会 1993 『ふるさと登栄床のあゆみ』
- 北水協会編纂 1943 『北海道漁業志稿』
- 北海道水産試験場 1934 『水産調査報告・第三十四冊』
- サロマ湖養殖漁業組合 1999 『サロマ湖の風一連帯と共生』
- 常呂町史編さん委員会 1969 『常呂町史』常呂町役場
- 常呂町百年史編さん委員会 1989 『常呂町百年史』常呂町
- 戸田裕子訳 (A. S. ランドー 著) 1985 『エゾ地一周ひとり旅』未来社
- 留岡幸助 1891 (明治24) 『編旅漫録』
- 北海道倶楽部編集部 1936 『北海道倶楽部』第3巻第2号
- 水野勉訳 2002 「明治24年・ジョン・ミルンの千島列島および北海道旅行」『北の山の夜明け』日本山書の会
- 山代昭三ほか 1972 「釧路のさかなと漁業」『釧路叢書』第13巻、釧路市
- 渡邊要編輯 1937 『常呂村史』常呂村役場

サロマ湖とカキと鑑沸

2008年3月31日

ところ文庫24

著者 永田 次男・豊原 熙司

編集 常呂町郷土研究同好会

発行 常呂町郷土研究同好会

北見市常呂町栄浦

常呂町埋蔵文化財センター内

制作 北海道出版企画センター

○本書刊行費の一部は常呂ライオンズクラブの助成金を受けています。

○表紙 : 中村二ニニ（常呂町郷土研究同好会会員）

○中扉 : サロマ湖の風景（ランドー1890）

本電子書籍は、常呂町郷土研究同好会より
正式に出版許可を得ています。

NPO法人

NPオホーツク湧別川流域部会